

No.130

公民館だより

平成19年6月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

大人社会の責任

由良地区公民館長 飯澤登志朗

宮津市教育委員会から平成19年度社会教育の重点が示されました。

生涯学習の実現、人権教育の推進、家庭・地域社会の教育力の向上、文化・スポーツの振興に大別されますが、今、社会問題になろうとしているのが家庭・地域社会の教育力の向上ではないかと思えます。

学力の低下から教育再生会議が「親学」を唱える等、子どもを取りまく環境は大きく変わろうとしています。

毎日新聞の社説に「子どもの

日」に関する記事がありました。

戦後の祝日法で定められ、一九四九年から始まり、その時々子どもたちが置かれた環境や大人の視点が読み取れる。として以下次のように年代を追って記されています。

・49年5月5日

戦中・戦後、過度に「立身出世」を子に望み、また強いた親たちの姿勢を戒めた。

・59年5月

「有害な環境から子どもを守る」戦後復興が進み、テレビや週刊紙が普及、映画黄金期を迎

え風俗華やく頃である。

・69年5月

「過保護」を取り上げている。

・79年5月

「親子の触れ合い」

経済成長、都市化、受験戦争、少年暴力、核家族化など戦後社会の大きな潮流が映し出されている。

・99年5月

「児童虐待」をテーマに。

直接に害を加える親らだけでなく、子どもを救えきれない制度や社会の怠り、不備が浮き彫りになった。

このように振り返ってみると今なお解決されず続いている問題が多くあります。

今の子は、今の若い者は、と話題になります。問題は基本的なルールをきちんと教えないことが原因の一つだと思えます。

老人に席を譲る、年長者に敬意を示す。路上にゴミを捨てない、等々社会のルールを教える

のは親や教師だけではなく、大人社会にも責任があります。

「親学」については、母乳で育てよ、子守歌や朝ご飯、テレビではなく演劇鑑賞などその内容に異論や反発があるようすが子どもにとって何が必要なのか抽象的ではなく具体的に基本作法や手段を示すことを議論しても良いと思えます。

教育基本法改正で今後、学校教育がどのように変わるのか関心を持ちながら社会への基本ルールづくりは公民館も疎かにできない問題と考えています。

由良の子どもも減少の一途にあります。地域全体の宝として健全な育成を見守りながら色々な機会にふれあいを大切にしていきたいと思えます。

因みに、89年5月は「子どもと家庭に関する実態調査」があり、対象の8割近くが「仕事と家庭の両立に努力している」とし、「家庭第一主義」に懸命な姿が浮かび出ています。

行事報告

主事 磯田 充亮

◎一月十三日(土)

卓球教室

生涯スポーツの普及と健康づくりの推進の一環として今年も開催しました。

三月末まで6回由良の里センターで実施、親子づれ等延36名の参加があり賑わっていました。

教室は終了しましたが、自主的に卓球を楽しんでいる人達がおられます。予約をして利用して下さい。

◎二月七日(水)

自治学級(出前市長室)

今回は市長自ら出向いて市民と対話する「出前市長室」を由良の里センターで開催し、由良地区から野村自治連合会長を始め80名の方が出席しました。

井上市長から今後の取組として財政再建・由良地区の診療所開設・インターネット環境の改

善等の報告があり、その後意見交換を行いました。

意見は市長の報告内容に集中しましたが、他に

- 一、観光面の集客力の向上
 - 二、幼稚園・小学校の統廃合
 - 三、府立大学との連携協力
- 等の意見や要望がありました。

特に診療所の設置には地区民全体の問題として早期実現を強く要望していました。

今回、多くの出席者があったのは自ら住む地域の活性化に対し強い関心を示したもので、高齢化が進む中で健康と福祉の確保を要求している意識を表したものと思われ、市長にその熱意が伝わったと感じました。

◎二月二十五日(日)

生涯学習講座(人権学習)

参加72名で宮津市教育委員会、教育相談室相談員 安見嘉

景先生から「子どもの安全と地域の関わり」主に児童の虐待、いじめ問題について、と題して講演をいただきました。

主な内容は

- 一、最近の子ども達の特徴
- 人間関係を築く力がない。
- 我慢・辛抱が出来ない。
- 遊ばない・遊べない等
- 二、最近の親の子育て方
- 良い子にするため厳しく育てる。
- 子育てが判らない等
- 三、いじめ・虐待の実態
- 身体的心理的虐待・性的虐待
- ネグレクト等
- 四、子どもが好む大人像
- 話しをゆっくり聞いてくれる。
- 自分の考えを一方的に押し付けない(良い子でなく役に立つ子育て)
- 人と比べない(違いは違いで認めてやる)等
- 五、子どもを育てる地域活動
- ボランティア活動をさす。
- 父母、高齢者等年齢差のある人達との体験活動。
- 地域環境整備と有害図画等の排除、特に携帯電話を使いたい

じめ等事例をあげて説明があり、深刻な実態が判明しました。

参加者から子ども達の人権問題を理解し由良地区の安全・安心を願う気持ちが伺われました。

◎四月二十九日(日)昭和の日

由良岳登山

昭和の日に変わった祝日、第41回由良岳登山を実施しました。朝は強風で肌寒く感じましたが、山に入ると絶好の日和になり新緑が映え、尾根のすみれが登山者を迎えてくれました。

今年も各新聞の地方版に行事が掲載され「新聞を見た」と舞鶴、綾部市等宮津市周辺から多くの人が参加され、中には4歳児や80歳前後のお年寄りが登り第40回記念登山より30名多い240名余りの方が登りました。

由良観光組合、実業会等の協力で山道や頂上の整備をしていただきました。ありがとうございます。特に西峰の整備で眺望が良くなり「天の橋立」をバックに記念写真を撮る人達が多く見受けられました。

学校に地域の力、知恵をこれま で以上におかしく下さい。

由良小学校長 山本文雄

本校は、本年度より児童数の減少により、複式学級を設置しなくてはいけなくなりました。

学校は小規模校になりましたが、由良の浜も由良ヶ岳も人々も、子ども達を昔のまま温かく見つめています。

しかし、子ども達は、その恵まれた環境を生かしてきているでしょうか。

自然の中で思いきり遊び、自然から教わることもなく過ごしているようで、地域の方の知恵も受け継いでないように思います。

小規模校になり、目が行き届きすぎ、支援も援助もしすぎになり、今はよくても中学、高校へと進むにつれ、自分の考えや知識を活用しなくてはいけない

場面で、力が出せない子を育てていないだろうかと思う時があります。遅しさにかけるのではと思う時もあります。

そこで、本年度は、学校教育目標を、学校だけでなく、保護者や地域の方にも知っていたべき、そのねらいとすることを知っていたため、次のようにしました。

「よく遊び、よく学び、よく食べる子の育成」

健康は何よりの宝物です。何でもバランスよく、好ききらいなく食べる子は、薬もいらなく、自分で病気を治せます。予防できます。体もきたえることができます。

よく学ぶ子は、吸収力があり知恵が回ります。活用する力も

ついてきます。大人の話がしっかりと聞けます。高齢者の知恵を大切にします。自然のたくましさ、厳しさも体験し、身で覚えていきます。

学校だけでは、学べません、地域の方の応援や協力で、子ども達が、よい体験ができるのではと考えています。

よく遊ぶ子は、人間関係能力にすぐれているように思います。

人間としての大切なかわりを遊びの中から身につけていくように思います。

時には、ケンカもしないと、正しいことは身につかないと思います。

このように本年度、学校教育目標を掲げましたので、地域の方々のご協力をよろしくお願ひします。

学校の中に、地域の方が子ども達は、色々な面で巾が広がり、小規模校の課題も解消さ

れるのではないかと考えています。

地域の子は地域で育てるといふ伝統も生きついでいる由良で小規模ならではの、教育が出来る素晴らしいなあーと考えています。

平成18年度 人権標語入選作品

心から 笑うあなたが みんな好き

尾崎 華 (栗田中学校3年)

教育に必要なもの

栗田中学校長 小西康徳

新年度が始まりはや二ヶ月が過ぎようとしています。この間に学校では、入学式・校内陸上・阿蘇海一周マラソン大会・修学旅行と行事を実施してきました。中でも五月十二日(土)に行われました第五十六回阿蘇海一周マラソン大会では、男子総合の部に於いて大会新記録を樹立し、見事優勝することが出来ました。本年度のスタートに当たり大変喜ばしい出来事です。

さて、近年の教育界を見てみると次から次に改革が行われています。そこで思うことの一つに、今私たちが行っている教育と、私たちが受けてきた教育との違いを感じるものがよくあります。その一つの例として、私たちの育った頃の大人は、「弱

い人がいじめられていたら必ず身を挺してでも助けろ」と教えられました。「弱いものを助けるためならば暴力もいとわな」と。だから、そういう場面に遭遇すると、誰かが中に入りました。

ただ、そういうときにも、絶対にやってはいけないことがあることも合わせて教えてもらいました。大勢で一人を殴ってはいけないこと、男が女を殴ってはいけないこと、武器を持ってはいけないこと、相手が泣いたら降参したらすぐにやめなければならぬこと、この五つは絶対に守れと教えられました。しかも、「理由なんかはない、卑怯だから駄目なんだ」と。

卑怯を教えるのには喧嘩が一番の教材です。大勢で殴る卑怯、

大きいものが小さいものを殴る卑怯、武器を持つ卑怯、相手が降参していても続ける卑怯、これらを学ぶことができるからです。幼稚園から小学校低学年くらいまでの子どもの喧嘩は、させても良いと思います。

ところが、多くの人は「暴力はいけません」「みんなと仲良く」と、美しいことをいう。子どもというのは、放っておけば言い合い、つかみ合い、その中で人間関係を育み学びあって

いくのが本来の姿です。「喧嘩をしてもいい。だけど、これとこれは絶対にしては駄目だ」ときちんと教えなければ、卑怯を憎むということは身につけません。

「卑怯」を教えなくなったこととの弊害は、学校に限らず社会の至る所に現れているように感じられます。

私たち大人の責任として、こういうことも教えることが大切ではなかるうかと思えます。

PTA活動について

由良幼小PTA会長 濱本喜彦

若葉の鮮やかな季節となりました。由良地区の皆様には日頃から由良幼小小学校PTA活動に温かいご支援ご協力を頂き誠にありがとうございます。

さて昨年十月より、下校時における子供たちの安全を見守っ

ていこうということで「由良子供安全見守り隊」の活動をはじめさせていただきます。

その活動内容といたしましては、通学路を三つのコース、Aコース：学校から脇・宮本方面、Bコース：学校から浜野路

(元四方医院) 方面、Cコース
 ……学校から港(ハクレイ酒造)・
 石浦方面に分けて各児童の下校
 (低学年は午後三時)(高学年は
 午後四時)に付き添うものとし、
 付き添いがむずかしい時は、(A
 コース:由良神社付近、Bコー
 ス:浜野路公民館付近、Cコー
 ス:ハクレイ酒造の四つ角付
 近)で子供の下校を見守る。
 といった基本活動を定め、こ
 れに当番表なるものを作成し
 て、各PTA会員に割り当てそ
 れぞれのコースの子ども達の
 下校を見守るといった内容にな
 っています。ところが、一日に三
 コースも同時に見守るには、現
 在のPTA会員及び先生方だけ
 ではむずかしい状況にありま
 す。

そこで、以前より子ども達の
 下校時のパトロールを行ってい
 ただいていた松寿会の方々や、
 児童民生委員の方々に加え、自
 治連合会及び公民館の方々と
 いった各種団体の方々、そして
 一般ボランティアの方々といっ
 たそれこそ由良全域の方々に広
 く声を掛けさせていただいて
 「由良子供安全見守り隊」に参
 加していただきその活動を支え
 ていただいております。
 最初に書かせていただいたよ
 うに、まだこの活動を始めて半
 年あまりしか経っておらず、P
 T A会員の中の連携もまだまだ
 十分とはいえず、何かと地域の
 方々にご迷惑をおかけしており
 ます。
 ただ、この活動をつづけるこ
 とによって、子ども達の安全
 を見守りながら地域の方々と子
 ども達そしてその親たちである
 P T A会員が地域の方々と交流
 し、その関係を深めていくこと
 によって、地域がより身近なも
 のになっていく気がいたします。
 最後になりましたが、子ども
 達が元気に下校している姿を見
 かけましたら声を掛けてやって
 ください。
 「おかえりー!」と

「すみません」よりも

「ありがとう」でいこう

子供会連絡協議会長 前 畑 篤 史

「すみません」という言葉は、
 自分が何かの過失を犯してし
 まったとき、迷惑をかけた相手
 に対しての「謝意」を表すもの
 です。例えば、遅刻して誰かを
 待たせてしまったとき…など。
 また、知らない人に声をかけ
 るとき、「すみません」といい
 ます。これは「すみませんが、
 用件を聞いてもらえますか」を
 略したもので、広義では前の意
 味と同じだろうと思います。
 とところが最近、相手が自分
 に何かをしてくれたとき、お礼
 の言葉として「すみません」と
 いう人をよく見かけます。自分
 が落としたものを拾ってもらっ
 たとき、贈り物をもらったとき
 などにも、「すみません」
 これはおそらく、「お手をわ
 ずらわせて、すみません」「気
 をつかわせて、すみません」と
 いう意味で使っているのではし
 ゃうが、その前に「ありがとう」
 といって感謝の気持ちを表わす
 のが適切だろうと思います。
 「ありがとう」というのも、も
 ともとは「ありがたい」という
 意味から派生した言葉であり、
 必ずしも感謝の気持ちを表すだ
 けの意味ではなかったかもしれ
 ませんが、現代では一番スト
 レートに「感謝の意」が伝わる
 言葉だろうと思います。
 人に何かをして「すみませ
 ん」といわれたのでは、余計な
 ことをしたのかもしれないとな
 んとなく恐縮した気分になる人
 がいるかもしれません。けれど
 も、「ありがとう」といわれれ
 ば、どんな人でも「喜んでもら
 えて、こちらもうれしいですよ」

と、素直に受け取り、すがすがしい気分になれます。

「感謝の気持ちでいつているんだから、いいではないか」…という人もいるでしょうが、「いう人」はそうでも、「いわれた人」は必ずしもそう受け取るわけではないということを考えれば、やはり「ありがとう」といったほうが適切です。

変わり行く婦人会

由良婦人会長 井野 和子

さわやかな新緑の季節となりました。皆様、こんにちは。

日頃は婦人会活動に暖かいご支援とご協力を賜り誠に有り難うございます。平成十九年度の婦人会会長を務めさせて頂く事になりました、井野でございます。何分にも慣れない立場でございますので、右往左往いたしております。この一年間、何か

どうせ感謝の気持ちを表わすのであれば、相手にもその喜びを味わってもらいたい、というのが「思いやり」です。そのために、「すみません」より「ありがとう」

ある本を読んで感じたことですが、自分自身はもろんのこと、子供達にも教えていければいいなと考えさせられました。

とお世話になります、どうぞ宜しくお願い致します。

現在の会員数は七十八名（脇十八名、宮本十四名、浜野路三十二名、港九名、上石浦五名）です。由良地区の人口推移と同じく、年々減少傾向にあります。状況は大変寂しい事です。最近では、由良地区を中心に活動しておりますので、以前に

比べますと行事数は少なくなっております。その分、地区行事に力を入れる事が出来るのかな？と考えております。

地域で暮らしていきます上では、地域の方々にお世話になる事が多々あります。それ故、出来る時に少しでも、地域に貢献する事が出来ればと思いい、又、地域の方々が安心して暮らせる事を願い、自治会や公民館行事のお手伝いをさせて頂いております。また時には、自己研鑽のために学習をし、親睦を図るために旅行やレクリエーション等を企画しております。

長い歴史を有する婦人会ですが、これまで「会則」がありませんでした。以前から「会」がある以上は、「会則」はあるのが当然だと言う意見があり、それを受けて、前年度の本部役員さんが素案を作ってくれました。そしてようやく、四月の総会で「会則」を作成する事が出来ました。

その総会で、「婦人会とはどのような資格で入会が出来るのか？」という質問がありました。以前は「家庭婦人」とされ、則ち「主婦」の会だったように思われます。「婦人」という言葉を辞書で引けば、(1)成人した女性。女子。(2)嫁いだ女性。…とあります。

そこで、私達由良では、「婦人」を「成人した女性」ととらえ、結婚していても、してなくても、入会して頂ける事といたしました。由良にお住まいの女性の方、是非、ご入会をお願い致します。そして一緒に、新しい、魅力ある会にして行きますよう！

この様に、私達自身も意識改革をし、新たな気持ちで頑張りますので、皆様方のご協力を、宜しくお願い申し上げます。



登りきった由良ヶ岳登山

五年 高野 守

四月二十九日の朝、八時三十分、由良小学校から、スタートしました。十分で二合目につきました。このときは、まだ楽だったので、まだまだいけると思いました。三合目で休けいをしたとき、お茶を飲みました。三合目が一番、急な坂道があったので、足がだるくなつて、「はーあ、足がだるいけど、体力は、まだ、あるから、だいじょうぶやろ。」

と言つて、登りました。四合目で、やっと、歩きながら、おかしを食べました。あめを食べました。六合目で休けいをして、お茶を飲もうとしたけど、飲めませんでした。七合目であるきながら、あめを食べました。ついでに、お茶を飲みました。そのときに

「速く登つて、べん当を食べたいなあー。はあー、あめでも食べよかな、キャラメルでも、食べよかな。足がめっちゃいたくなつたし、体力が全然なくなかないからなあー。」

と言つて、登つて、八合目までいって、もうすこしやから飲んだりするのは、やめようと思ひ、がんばり、九合目をとおつて、ちよう上にいきました。

「はあー足がだる、はよ、べん当食べよ。」

と言いました。でも、そんなに食べられません。十一時ぐらいから、おりはじめました。ほとんど走つて、おりました。じゆん位は、二十番でした。昨年より速かつたです。来年も登りたいです。

とつても長くて、えらかつた由良ヶ岳登山!!

五年 磯本えなみ

四月二十九日に、由良ヶ岳登山にチャレンジしてみました。佑奈ちゃんと愛実ちゃんと未来ちゃんと私で、チャレンジしました。

由良小学校で、体そうをして由良ヶ岳に登り始めました。登り始めて、すぐに、えらくなりました。友達が、「えらいなあ。」

と言つたので、私も、えらいなあと思ひました。

それから、ちよつと登つては、休けいし、ちよつと登つては、休けいして登つて行きました。十分ほど、登つて行くと、いっぱい水がありました。やっここまで、きたあとと思ひました。

その後、けっこう歩いて、頂上というかんばんが、ある所まで、進みました。

「後、ちよつとで、頂上まで、つくんなあ。」

と言ひました。みんなもそう言つていました。それで、やる気が出てきたので、ちよつとはや歩きをしました。でも、ぜんぜん、頂上にも着かなかつたし、わかれ道までも着きませんでした。とつても、残念でした。ちよつとやる気が、なくなりました。

でも、ちよつとたつと、また、やる気がでてきました。やる気が出たので、三十分位つきにあるきました。と中で、二回ほど、休けいしました。やっこわかれ道の所まで、たどり着きました。すっこく、すっこくうれしかつたです。由良が見える方がみじかかつたので、由良が見える方に行きました。ちよつ

とながかったけど、すぐに頂上が見えてきました。登ってきたなかで、一番うれしかったので、頂上まで、走りました。頂上にやっと着きました。けっこう、長くてえらかったけど、頂上の景色も最高だったし、とってもうれしかったです。でも、少し暑かったです。でも、おべん当を食べると、とっても気持ちよかったです。しかも、いつも、食べるおべん当よりも、おいしく感じました。おべん当を食べた後、頂上で、おにごっこをしました。とっても楽しかったです。その後、登ってきた方と、は

ん対の方に、おりる道がありました。おりてみると、はりのある葉があつたので、ちよつとこわかったです。下におりてみたけど、何もありませんでした。また、ちよつと残念でした。また、頂上まで登って、おかしを食べ、下におりました。また、長い旅がはじまるなあと思いました。でも、楽しみでした。おりる時もけっこう楽しかったです。

登ってきた道を、もう一回見たら、だれも来ていませんでした。私は、「やっぱり、さいごなんかなあ。」と思いました。そして、また登り始めました。そして、人が来たので、その人に、「まだ登って来る人は、いるんですか。」と、聞いたら、「もうすぐ、来ると思う。」と、言っていたので、「さいごじゃないんだな。」と思いました。そして、登っていると、「頂上」と書いてあったので、「もうすぐかあ。」

そして、やっと頂上につきました。私は、「やったあ。」と思いました。次に頂上で、おべん当を食べました。おいしかったけど、くだ物が、ぬるくなっていました。おべん当を食べ終わったら、おにごっこをしました。にげている時に、下の景色を見たら、とてもきれいでした。由良小学校は見えたけど、自分の家は、見えませんでした。それで、おかしを、少し食べてから、下におりました。登る時より、帰る時の方が、楽しかったです。下においたら、おじさんに、番号が書いてある紙をもらいました。私は、二〇三でした。しんどかったけど、来年も、登りたいです。

しんどかった由良ヶ岳登山

五年 稲垣 未来

今日、由良ヶ岳登山がありました。友達といっしょに登りました。由良ヶ岳の頂上につくまで、三時間ぐらいかかりました。初めのうちは前の方

だったけど、休けいしていら、どんどんぬかされていきました。「私たちが一番さいごなんかな。」と友達が言いました。そして、

一回目の由良ヶ岳登山

五年 立井 愛実

四月二十九日、由良ヶ岳登山に参加しました。私は、登る時

が一番えらかったけど、心に残りました。最初は、これぐらい

平気と思えました。みんなと楽しく登っていききました。

「なあ、どんなおかしもつてきたん。」

「こんだけ、もつてきたでー。」

みんなでおかしを交かんしあいました。だけど、三合目からすぐくえらくなつてきました。

最初の元気は、すっかりなくなつてしまいました。そして、と中「水」というかんばんを見つけたけど、早く登りたかつたので帰りによるかあ、というこゝとなりました。一番えらかつたところは、スギの木の間いっばいある道のところでした。急な坂道がたくさんあつたので、これはつかれるぞうと思つていました。予想通りとてもつかれました。だけど、あとちよつとあとちよつと思つて登つていました。でも、なかなかスギの木からぬけませんでした。もう、つえがなかったら、私は登れないくらいでした。でも、やつとスギの木からぬけました。上か

ら見てみると、意外と短い道だったので、こんなにたくさん時間がかるんだと思ひました。

そして、少し歩いて頂上に着きました。とても、うれしかつたです。景色は、由良の町がとても小さくて家もけいみいたいにみえたので、頂上はすごいなあと思ひました。頂上で食べるお弁当は、とてもおいしく感じました。とても、暑かつたけどなぜか、気持ち良かつたです。

そして、ちよつといやな下りです。ズルズルとすべつて、よくこけてしまいました。下りる時は、みんなできよう力して下りました。とても、こわかつたです。とちゆう、景色を見ました。頂上から見る景色とは、ちがう景色でもきれいでした。そして、「水」のところに下り坂で本当に水はあるのかあと思ひました。水はありました。飲んでみると、とてもつめたく

ておいしかつたです。水は、あまりおいしいと思つたことがなかつたけど、とてもおいしかつたです。そして、とうとう由良ヶ岳を下りました。とても、うれしかつたしつかれました。そして、登山証明書をもらいました。結果は、二百四番目でおそい

気持ちよかつた山頂！

五年 柘 岡 佑 奈

四月二十九日、私は由良ヶ岳登山二回目にもちよう戦しました。

えなみちゃんと、みくちゃんとなまみちゃんと登りました。体そうをしてから行きました。そして、登り始めました。ワクワクしました。でも、登り始めると、急な所があつたりして、去年の大変だつた事を思ひ出しました。きゆうに不安になつてきました。歩いていると長い木の枝を見つめました。つえにな

方だつたけど登りきつたので、良かつたです。来年もまた登りたいと思つたし、今度登る時は二百番をきりたいと思ひました。

今年は、いい由良ヶ岳登山になりました。良かつたです。

りそうだつたので、ラッキーだと思ひました。それから、つえのおかげで楽に登る事ができました。と中で休けいもしました。おかしを食べたりしてました。おかしを食べたりしてました。そしてまた、進んでいきました。少し歩くと休んで、また、登つていくのをくり返していきました。一番多く休けいしているのは、私たちかなあと思ひました。歌を歌つたりして、元気をとりもどしたりしてました。そして、水を飲む所が

あったけど帰りに飲む事にしました。山頂はまだかなあと思ってくるようになってきました。五合目ぐらいになると、もう、帰ってくる人がいました。

「すごいなあ、山頂はどうでしたか。」

と聞きました。そしたらその人が、

「気持ちよかったよ。」

と言っていました。私は、早くちよう上に着いてほしいなあと思っていました。

そして、分かれ道がありました。左の方に行きました。去年と同じ方でした。

「もうすぐだね。」

とみんなで言っていました。でも、そこからも、長いきよりでした。何度も休けいして、やつと山頂につきました。うれしくてうれしくて、由良ヶ岳登山にちよう戦してよかったと思えました。さつそくおべん当を食べました。ちよう上で食べたおべん当は、いつもとちがってすこ

くおしかつたです。おにぎり三つなんて、すぐになくなりまし

た。景色も最高でした。私の家は、よく分からなかったけど、

由良が美しく見えました。学校もすこく小さかつたです。おべん当を食べ終わって、みんなでおにごっこをしました。楽し

かつたです。そして、おりていきました。帰りは楽でした。でも、すべったりしそうだったの

で、少しこわかつたです。おりていると、うぐいすの音がきこ

えました。

「ホーホケキョ。」

と、私たちは、まねしてました。山は自然にかこまれている

なあと思えました。

そして、水が飲める所に行きました。細い道ですこくこわ

かつたけど、水を飲んだ時は、がんばってよかつたと思いま

した。山水は水道水より、何倍もおいしかつたです。水を飲んで

私は元気をとりもどしました。スピードがでてきました。

そして最後は、走ってゴール

しました。紙をもらいました。二百一番でした。おそくても、

がんばったからいいと思いま

た。

来年もチャレンジしたいと思

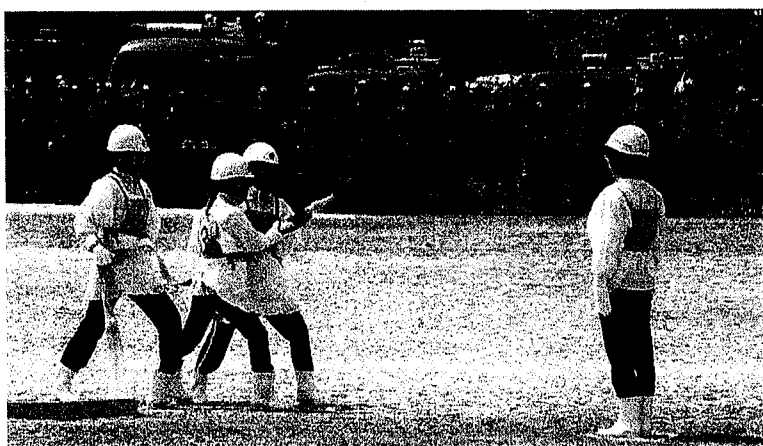
自衛消防隊消火栓操法

有本仁美

平成十九年四月十五日、宮津市消防団春季連合訓練が由良を会場に挙行されました。

各地区消防団員の皆さんに続き、総勢八十名の由良婦人自衛消防隊の「凜然」とした大行進の後、グラウンドに入場し「整然」たる隊列を組んだつもりでありました。

この消防訓練が執り行われるに当たり、今回の消火栓操法は浜野路と港が当番だという事をお聞きし、操作員は班長の中からという事で、お引き受けしなくてはならないことになりました。



浜野路の各操作員は、隊長に中西一義自治会長様、指揮者に有本、一番員に濱野美香さん、二番員に中西慶子さん、三番員に田中衣里さん、四番員に中西美智代さんの六名で、大会前一週間、毎晩、消防団の皆様にお世話になり練習をする事になりました。

練習第一日目。消防団員の方々に見本を見せていただきましたが、細やかな動作が複雑でなかなか呑み込めず、当日は浜野路は市長さんをはじめ、役職の方々のすぐ目の前での操法というところをお聞きしていただきましたので、五人一同、練習第一日目にして、青ざめてしまいました。

第二日目。五人は、昨日いただいた「消火栓操法の手引き」の各パートをしっかりと頭に入れ込み臨みました。が、行ってみると、せりふを言う順が逆になつたり、指揮者である私が号令をかけるのを忘れてしまい、四人の操作員は動くことができ

ず、向き合い、目と目を合わせたまま、しばらく静か…な空気が漂ってしまったり…。

第三日目。だんだん様子が呑み込めて来ました。何度も練習し、消防の皆さん方はお疲れの様でしたが、

「最後にもう一度させて下さい!!」

とお願いし、見ていただきました。

ちょうど桜が満開で、グラウンドのライトに照らされた夜桜はとても美しく、私達は、口々に「引き受けたからには一生懸命やろうな。」

「ヘナヘナしないでピリツと引き締めて頑張ろう。」

「ここまで覚えたんで、完璧を目指したいな。」

などと、夜桜の下でみんなの気持ちはひとつになつていました。

七日後、いよいよ当日を迎え浜野路は本部席の前にも関わらず、後で聞くと、みんな操法に

全神経が集中していて、全く動じなかったということでした。

とにかく一番大切な事は、「大きな声」を出すことと言われていたので、お腹の底から発声する様心掛けました。前日までも注意を受けていたところに気を配りながら、無我夢中のうちにいつの間にか最後の言葉、

「駆け足、進め。」

と号令をかけていました。

自分の中では反省点はたくさんありましたが、自治会長さん共々六人で力を合わせて、一生懸命取り組んだ事に、すごく爽やかさを感じ、満足感で一杯でした。

後では、消防団員の皆さんにお誉めの言葉をいただいた事が何よりも嬉しく思いました。五人一同、充足した一週間が終わりました。

最後になりましたが、中西分団長様をはじめ、消防団員の皆様方には、毎晩、毎晩、誠意ある御指導をいただき、また貴重



な経験をさせていただき本当に有難うございました。

ひとことだけわがままを言わせていただければ、次回また由良婦人自衛消防隊に操法が当たる頃までには、若い皆さんの為に、出で立ちを少しだけでも「現代風」に改良を加えて下さいます様、心よりお願い申し上げます。

駐在所赴任挨拶

村田浩至

この度の人事異動で、西陣警察署から宮津警察署由良駐在所にて勤務させて頂くことになりました村田と申します。よろしくお願い致します。

今だ未熟な私ですが、由良地区の皆様方の心温かいご理解とご協力を頂き、また、自治連合会長様をはじめ、各自治会長、防犯推進委員、各種団体の皆様方のご指導を賜り、微力ながら由良地区を犯罪や事故のない安全で安心な街にするため、最大限努力する所存でありますので、何卒よろしくお願い致します。

さて、私の経歴を簡単に説明させて頂きますと、平成十一年に警察官を拝命し、交番、パトカー勤務を経て、今回、宮津警察署勤務となりました。

交番・駐在所というのは地域の皆さんと警察が身近に接する場所であり、「警察の顔」ともいえる場所です。

私はこの「警察の顔」である交番勤務で、様々な人と出会い多種多様な活動を通じて、「地域に密着した警察活動の重要性」、「地域の想いに応える必要性」を学び、また、肌で感じてきました。

近年、幼い子供たちが被害者となる痛ましい犯罪や振り込め詐欺や悪徳商法のようなお年寄りを狙った犯罪などが新聞紙上を賑わせております。

特に子供たちを取り巻く環境の変化は目まぐるしく、学校内での凶悪犯罪、登下校時における連れ去り事件など、子供たちの安全を脅かす犯罪が多登して

いる状況であります。

由良地区におても例外でなく、いつ何が起きるか分かりません。

現在、由良地区においては、ご父兄を始め、学校の先生、地域ボランティアの方々や各種団体の皆さんに登下校時の付き添いや声掛けをして頂いております。

これは、地域の子供たちやお年寄りを犯罪者から守り、犯罪を未然に防止するための大きな力となっております。

防犯は警察の力だけでは限界がありますので、地域の皆さんと手を携えながら共同活動を積極的に推進するとともに、地域の実態に即した安全情報の提供に努め「安全・安心な由良の街」を実現するために尽力してまいります。

そして、地域の力、防犯意識が高まっている今だからこそ、「真に地域に密着した警察活動」が必要なのだと切に感じており

ます。

私は今、二十八歳という若輩者であります。

現在は妻と二人で生活しておりますが、この夏には、待望の子供が誕生する予定です。

私は以前、由良を訪れた際、海も山も川もあり、自然豊かで温かい街だという印象を持ちました。

このため、宮津署で勤務することを希み、今回その希望がない、また、憧れの場所で子供を育てられるということを中心に喜んでおります。

それと同時に父親として責任の重さを感じ、由良駐在所勤務員として職務を全うする決意を新たにしております。

まだまだ未熟で、これから地域の皆さんにご迷惑をお掛けすることが多々あるかもしれませんが、「安全・安心な街、由良」のため、粉骨碎身の覚悟で努力してまいりますので、よろしくお願い致します。

五十年目の真実 (IV)

(文豪三島由紀夫と丹後由良そしてポップ屋(鉄道員) 修さん)

藤沢市 平 間 武

是非もう一度あの元気な頃の修さんに戻って、国内はもとより、今では世界中で翻訳され、人々に読まれ続けて不朽の名作となった「金閣寺」の作家・偉大な文豪との出会いについて、明るく爽やかなあの口調で、修さん得意の冗談話も交えながら私達に語りかけて欲しいものである。その時は私も修さんに是非、問いかけてみたい、駅舎内で彼に講釈した映画の題名は何だったのか？ 駅長の帽子を被りおどけてみせたその時、彼は独特の甲高い声で笑い転げたのか、それとも照れながら、あのニヒルで静かな笑みを浮かべていたのかと。三島にとっては丹後由良という京都の片田舎の町で、国鉄の一駅員として明るく、イキイキ、のびのびと、そ

して個性的で「らしく」生きている修さんは、おそらく新鮮さと躍動感に溢れており、その人生にある種の羨望さえも感じたのではないだろうか？ 駅舎内での修さんを観ている時に三島の目が妙に複眼的に思えてしまうのは私の考え過ぎであろうか？ ひとつは「金閣寺放火犯」の目、もうひとつは作家・三島由紀夫の目、さらには私人・平岡公威(ひらおかきみだけ、三島の本名)の目ではなかっただろうか。私には本文の一部からもそのことが強く感じられて仕方がないのである。越中おわら節の一節にある「浮いたか瓢箪(ひょうたん) 軽そに流るる、行く先や知らねどあの身になりたや」そんな心境ではなかったのだろうか。三島はその時、物書き(作

家)としてこの世に生を受けながら、自らの命をも自らの手で絶たねばならぬという宿命を背負い、そのゴールを目指して、すでに悲しい助走を始めていたような気がするのだ。

由良での夏休み最後の日、今では当時とスッカリ様変わりした駅舎をいつもより感慨深く観ながら、私は50年前の二人の出会いの場、丹後由良駅をあとにした、その帰り道、当時三島が宿泊した「日の出旅館」の裏手には私が幼い頃、友とザリガニ取りをして暗くなるまで遊び呆けた田んぼが今でもあった、そこにはまるで過ぎゆく夏を惜しむかのように賑やかに赤トンボたちが舞っていた、まるであの日、市ヶ谷上空を行き交ったヘリコプターのように！ 奇しくもそれは文豪・三島由紀夫の没後、35年目の夏、おそらく彼も目にしたに違いない、その田んぼを横目に見ながら帰路に就き、私の不思議な夏が終わった。

以上は新潮社と山梨県山中湖畔にある三島由紀夫記念館の三島由紀夫担当者の情報に基づき書き綴った私の「自分史」の一部です。

追記

三島由紀夫は不審者として丹後由良派出所(交番)に通報されていた！

丹後由良駅前の「日の出旅館」で宿泊の手続をとった三島は、そこに二泊していたことが磯野修三夫人の平成十七年九月二十五日の聞き取りで明らかになった。

以下はその日の磯野夫人の情報によるものです。当時、日の出旅館の女将だった中西信子さん(現在九十三歳)がその時のことを思い出して語った話では、その日、旅館を訪れた三島は宿帳に名前も記さず、案内された二階の六畳の間に閉じ籠もり、なんと二日間、食事で階下

に降りることもなかったのである。不審に思った女将は派出所に連絡して、急ぎ駆けつけた警察官から彼は不審尋問を受けたということであった。

本文中で「三日間にわたる由良館の逗留が打ち切られたのは、その間一步も宿から出ない私の素振りを怪しんで内儀が連れて来た警官のおかげであった」と皮肉っぽく犯人の立場で書いていたのは、まったくの創作ではなく三島自身が実際にそこで体験した出来事だったのである。

そして女将がその宿泊客を三島と認識したのは「金閣寺」が出版されたあとのことであったことも明らかにした。小説を読んだ読者やマスコミ関係者が何人も「由良館」の所在を確かめるために「日の出旅館」に来て、始めて「ああ、あの時のあの不審な人物が」と思ったのである。私が思うに、今も「日の出旅館」に残る二階六畳間

で、三島は二日間ひたすら原稿用紙に向かい丹後由良での出来事を夢中で書き捲くしたのであろう。どうも名作「金閣寺」の一部は丹後由良で執筆されたものようである。



ニューギニアのポスネック海岸

―父の足跡を探して― (II)

「西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団」に参加して

三嶋 昌子

〔八月二十七日〕

今日の巡拝地はサルミ地区、遠方のためチャーター機を手配、人数制限があるためにピアク島関係者七名は残されることとなった。残った者はヘイズさんのご好意で、市内見学に連れて行っていただくことに。空港やホテルの名前になっている湖「セントタニ湖」で水上生活者の住居を見た後一般市民の市場やスーパーマーケットなどを廻りヘイズさんの通訳で面白い物を楽しんだ。行く先々で人々が「ジュパン！」と言って、親しく手を振ってくれたのが印象的だった。サルミ地区巡拝者の帰りを待つと一緒に昼食を取り、午後には日本から持って行った車椅子を持ってアペプラ病院を慰問。その後アピバンダイ(旧・コタバル)の巡拝に出かけた。ここ

は戦後政府によって、慰霊碑が建てられており碑の前で慰霊祭を行った。地元の人達によってきれいに管理されている場所であった。その後、時間がまだ早いとの事でインドネシアの「天の橋立」へ？湾になった場所に砂州が突き出て通り抜ける事は出来ないようだが同じ風景に見えた。ニューギニア・ピアク島は京都や福井の人も多く行って居たというのを聞いた事があるので、故郷を懐かしむ気持ちでこう呼んだのが今だ残っているのだろう。その気持ちを思うと胸が痛んだ。ホテルへ帰り夕食を取ったが昨日の朝から毎食同じメニューなのは少し閉口した。部屋へ帰りシャワーを浴びたがお湯が出ない。仕方がないので水シャワーで辛抱、この後ピアクでの二晩も水しか出ず、

お湯の有り難さを痛感。後で聞くと、どの部屋も水だったそうである。

八月二十八日

今朝はいよいよビアク島へ出発の日となった。ビアク島は日本時間との時差が無いとの事で朝九時に到着、はるばると来たと思うと感慨もひとしお、身が引き締まる思いがする。抜けるような晴天で太陽が肌にチリチリと暑い、汗が噴き出してくる。やっぱり赤道直下だけあって暑さが違うなと思った。相変わらずの古いマイクロバスでホテルへ。早目の昼食を済ませた後、残る三ヶ所の巡拝に出かけた。ソリド海岸・天水山方面でそれぞれ慰霊祭を行った。今までは余り目にしなかったが、ビアク島に来てあちこちで戦争の残骸を目にするようになった。日本軍の戦闘機の残骸や砲台、無数の砲弾、穴だらけのドラム缶などが、地元の人達によつてきれいに管理保護をされている。又戦争とは不釣り合いのきれいな海岸には、日本軍

の棧橋の脚桁だけが残り、その数の多さには驚いた。いよいよ最後父達がいたサバ地区農場跡での巡拝に向かった。それまでずっと晴天に恵まれた巡拝だったが、サバ地区に近づくとつれものすごいスコールとなった。バケツをひっくり返したようなどしやぶりの雨。「来てくれたと喜んでる涙雨だ。」とか「連れて帰って欲しいという



涙雨だ」とか、それぞれの思いで雨を見つめていた。慰霊碑が建っている場所では出来ないという事でそこが見渡せる屋根のついた門のような建物跡で、雨を避けて慰霊祭をする事となった。広々とした農場跡には背の低い草が生い茂っていた。当時日本から一ヶ月以上掛かって船

で来た為、輸送の途中に全て撃沈、補給路を断たれ、兵士の食料を確保する為の農場だったそう。しかし土がやせていて余り出来なかつた様である。雨の中で巡拝を無事済ませ最後に皆で「お父さん一緒に帰りましょう」と大きな声で呼びかけた。その声がこだまして木々の中へ吸い込まれていった。各慰霊碑の前で、皆が涙し「君が代」「ふるさと」「里の秋」などを歌い、亡き父を想い、冥福を祈った事は一生私の脳裏に焼きつく事となる。この三日間父の為に初めて泣いたように思う。歳のせいもあるのかと思うが今までのいろいろなることが頭をめぐり自然に涙が出てくるのには閉口した。しかしお陰で気持ちになんとなく楽になったような気がして本当に来てよかったと改めて思った。このスコールの後、乾季には珍しいとのことであるが、最後の日まで曇りとなり、暑さから逃れ涼しい中での滞在となった。はるばる尋ねて来た私達に、父からご褒美だったの

かもしれない。

今日巡拝した三ヶ所の花を持ってポスネック海岸へ。椰子の木が高くそびえこの海岸で戦争があつたなど想像も出来ない素晴らしい眺めの海岸。どこまでも澄んだ水がキラキラと光っている。日本から来た父達がこの海岸へ上陸し、又連合軍が総攻撃を開始したのもこの海岸との事で、花を手向けて手を合わせた。ちようど海岸の正面に敵軍の前線があつたという島が見えた。この島から敵軍が撃った砲弾が雨アラレの様に落ちたそうであるが、日本軍が撃った砲弾は途中でみな海に落ちてしまったとのこと。それだけの戦力の差があつたそう、勝ち目の無い戦いだつた様である。豊富な資源を求めてとはいえない遠くまでどうして来たのか、不思議に思われ、本当に無駄な死だつたように感じた。その後明日追悼式が行われる「第二次世界大戦慰霊碑」前の清掃に行き、その日の予定を終了した。

蜂子皇子

山下憲弥

(二) 蜂子皇子物語

蜂子皇子の伝説は、各地に散在しており、その内容も部分的に異なつたところがある。それぞれが、その土地中心のものであり、その土地以外のことは、つなぎとして、前後に簡単な説明的なものがある程度である。おおよそつながつていても、途中に解説が入り、物語はしばしば中断している。

私は蜂子皇子の一生を歴史的、宗教的見地も加味して、一応妥当と思われる道筋でまとめてみた。解説は出来るだけさけている。解説的なものは(注)を参照されたい。これから記述する蜂子皇子の一生は、伝説そのものではなく「蜂子皇子物語」として読んで頂ければ幸いである。

蜂子皇子は第三十二代崇峻天皇の第一皇子であつた。当時、大臣の蘇我馬子は、王権を軽視し、専横の振舞が多く、政治をほしいままにしていた。これに對して、天皇はしだいに反感を抱くようになった。同天皇五年十月猪を献上した者があつた。天皇は猪を指さして「いつかは、この猪の頸を斬るうちに、自分のきらいな男を斬つてやりたいものだ。」と言ひ、いつになく多くの武器を用意させた。これを聞きつけた馬子は、身の危険を感じて、翌十一月東漢直駒に命じて天皇を殺害させた。任那再興のため新羅を討つべく大軍を筑紫に向かわせた留守を狙つた犯行であつた。蘇我氏の軍勢に對して、朝廷の軍勢は劣勢でとても太刀打

ち出来ない。蜂子皇子は身の危険を感じて、皇居倉梯宮よりの脱出をはかった。少数の近臣と共に大和、山城、丹波を経て丹後の由良に辿り着いた。由良の村びとたちは、皇子を暖かく迎へ入れた。しかし、ほどなく、由良でも身の危険を感じるようになり、安住の地を求めて百済に亡命することを決意した。

(注) 蜂子皇子に關して、一応妥当と認められている伝説の中では、舟出の行先は伝えられていない。行先のない舟出は死出の旅である。皇子は死出の旅に舟出したのではない。舟出の行先が示されている伝説も二、三あるが、その物語りの内容が、飛躍しており、論外のことなので、取り上げなかつた。

百済とは祖父、欽明天皇(第二十九代)の御代には深いつながりがあった。任那の経営問題や仏教伝来などがあり、親密な交流があつた。その後も伯父の敏達天皇(第三十代)、父の

崇峻天皇(第三十二代)に至るまで親しい交流は、ずっと続いてきていた。

ある年の夏五月、皇子は由良の湊より、丹後の舟方を水先きにして、百済へ向かつて舟出した。途中、激しい暴風雨にみまわれ、日本海を北へ北へと流され、庄内由良の沖合まで漂流してきた。

(注) 欽明天皇三十一年夏四月と敏達天皇二年夏五月に高麗の使人が海路に迷つて、越(北陸地方)の海岸に漂着したとの記録がある。特に、後者の場合、舟がこわれ、溺死した者が多かつたと述べられている。夏、日本海はよく荒れたようである。

ある日の朝、皇子は突然思いがけない光景に眼を奪われた。急に紫雲がたなびき、天上より妙なる音楽が聞こえてくる。眼をこらすと、荒海にそそり立つ断崖絶壁と巨岩が眼前にあり、その岩上で八人の美しい乙女が

さかんに領布を振り、笛の音に舞いながら皇子を招いている。その招きにみちびかれて、皇子たちは海岸に上陸した。おそらくは、晴天に恵まれた当日、村の祭りの行事で乙女たちが笛の音に合わせて踊っていたのであろうが、台風に遭難し、生地獄を見、九死に一生を得た皇子の眼から見れば、そのように感じたのは不思議ではない。

当時、蝦夷はまだ未開の地で大和朝廷の勢力下にはなかったが、村びとたちは、皇子を暖かく迎え入れた。そして、生き残った舟人たちは、ずっとこの地に留まり、故郷の地名を取ってこの地を由良と名付けた。なお後日、この伝説にちなんで、この海岸は八乙女浦と名付けられた。

蜂子皇子は、しばらく、この地に滞在していたが、ある日、三本足の大鴉が飛んできて、何となく皇子を導くような様子をするので、ついて行くと、やが

て老樹の鬱蒼と茂った靈山に着いた。ここは、羽黒の阿久谷であった。清々しい滝が絶壁からまろび落ちており、近くに岩窟があった。皇子はこの岩窟に籠もり、葛の衣を着、木の芽を食して、ひたすら苦行を重ねた。そのため他に類を見ない異相の修験者となった。苦行の結果、先ず日本古来の山岳宗教の神を感受し、次いで観音菩薩を感得し、のちに聖なる火をおこす秘法を体得して、月山、羽黒山、湯殿山のいわゆる出羽三山を開いた。

(注) 異相の修験者Ⅱ蜂子皇子は顔が醜く、まなじり長く髪の中まで入り、口は大きく耳の根元まで裂け、鼻は下にさがって一寸も垂れ、顔の長さは一尺もある異様な面相であったと伝えられている。

(注) 蜂子皇子を修験道の行者として記述したが、伝承に合わせたのである。皇子は仏教(当時の仏教は国家仏教)の素養は

あったと考えられるが、修験道の素養は全くなかったと考えてよい。修験道は、日本古来の山岳宗教に密教・道教などを取り入れて発達したものであり、その基礎は、役小角によってつくられたとされている。役小角が活躍するのは、蜂子皇子が羽黒山へ入山したときより百年近くも後のことである。

伝説・伝承は後世になって、都合のよいように追加、修正されて行くものである。しばしば年代を超越する。年代的に矛盾があるとあげつらうのはナンセンスである。現在、一応妥当と認められているものは、そのまま素直に受け入れたらよいのではなからうか。伝説とはそんなものであるということ念頭におきながら……。

蜂子皇子は、村びとたちが豊かに安定した生活を営むことが出来るように、保存のきく五穀の栽培を教えることを思いついた。庄内平野の開拓を村びと

ちに働きかけ、自らも雑木を切り倒し、雑草を刈り払い、水利工事も行い、五穀の種子を播いた。発芽した苗は順調に育ち、秋には相当の収穫があがった。村びとたちは始めて五穀を食べ、歓喜して皇子に感謝した。また、皇子は神仏の教えを熱心に説き、人びとの苦悩をよく救ったので「能除太子」と尊称された。

蜂子皇子は人びとに稼穡の道を教え、その苦悩を取り除き、道を弘めること数十年、第三十四代舒明天皇十三年十月に九十一才で薨去された。

(注) 能除太子Ⅱ般若心経の中に「能除一切苦」という句がある。Ⅱ能く一切の苦を除くⅡあらゆる苦悩を取り除いてくださる皇子さまの意

(注) 稼穡Ⅱ作物の植付けと取り入れ

(付記) この原稿を書くにあたって、随分とたくさんのお書物や冊子類を参考にした。学術的論文ではなく、伝説の紹介なので、いちいちその出典を明らかにしない。ご了承ください。

短歌

山口 幸一

自分史の内なる荒野ひろがり

貫き得しは加令のみにて

今も尚わだつみの底に眠れる君想う

荒廃果てなき国に生きいて

昭和史の転向の苦悩に遠くして

いま日常茶飯なる変節の思想

蹉きし過去は語らずしたたかに

八十路半ばにこれも仕合せ

戦争の責任のがれる卑怯さは

国民の性かと留学の助手

日本人 されど日本という国が

いよいよ遠のく老残の孤独

私にとつての「王子山」今昔

おうじやま

濱野路 大森 孝

(一) 三つ葉つつじの思い出

待ちに待たれた櫻が開く季節が今年もめぐってきた。幼い子供たちは胸一杯の抱負と向上への期待を全身に漲らせて入園する。母親に手を曳かれて。

その時は又つつじにとつても懸命に存在を誇示して、めぐってきた四月にあらん限りのあざやかさを見せているようだ。そんな、極くありふれた三つ葉つつじの一株と、その傍らにあった、やや小振りの株の二本が、私の物心ついた「四才又五才当時から」幼児の頃からの、心の中に生きている。いわば、私の美の原点でもあったろうし、癒しの始まりの風景に外ならなかった。

それが、堂上の^{そまみち}杣道の分岐地点を三月末になると、彩った。

淡いピンク色の山に自生した山のつつじだったが、匍うようにして杣道を、それでも50メートルは登っただろうか。幼稚園へ上がる前の子供にとつては、うちのみかん畑へ入る手前の土手の上に一年を辛抱して艶やかにみせようと、上の枝から下の枝へと順を追って^{つぼみ}蕾を開いて行く姿は愛ほ^{いと}しいものと映った。

そんなどこにでもあるつつじの花に一息入れて、左手の巨岩を廻ると、うちのみかん畑の早生みかんが^{まわ}際まで植えられているのだった。

何かのついでにみかん畑に立ち寄ると、こんな三つ葉つつじに迎えられる、ここで山の空気を吸って、静けさに浸ったものだ。春の使者とも云える、里山の三つ葉つつじは、堂の上をお

りると、溪流を渡って、私にとつて「王子山」へ降りる。こは平らな原っぱで、由良の東の半分を眼下に見渡すことのできる、高所である。

私にとつての「王子山」は、こうして、多感な少年時代を経て、古稀を8才も超えた現在に至る迄、数多くの体験と回想を紡いでくれた。大切な場所であつた。

(二)父とみかんの虫を見にきて(敗戦後の晩秋)

敗戦の昭和20年、年の暮れだったが、父に教えられて、この堂の上のみかん畑へやってきたのだつた。因みに父は応召で、六月に入隊。和歌山県下、海草郡で海岸防備のため、アメリカ軍の上陸に対峙して布陣していた。私は志願して、山口県防府市の海軍兵学校に78期生徒として、日夜研鑽。

家庭を守っていた母が、みかんの木のかみきり虫を駆除してほしいとの願ひがあつて、父と

兩人で、自転車の油やら、浴衣の古い布切れやら、長い釘などを携えて、里山のみかん畑へ行つた。冬から早春に健気に咲く山の椿も今はなく、杣道の凸凹道をつみ上げた台石を踏みつけて上がると、そこには巨岩が待つ私の原風景。父がみかんの木の根本を一本一本確かめ乍ら、漸く、大小30指にあまる、主に中手と分類されるみかんの木を調べてまわつた。

11月は由良ではとりわけ日没が早く、時雨も多く、その日もシャーツと音をたてて、広葉樹や杉の木立の間を俄に雨が落ちてくる。天を仰ぐと冷たい雨が筋をひいて落ちてくる。篠突く雨だがぼつかりと木立で囲まれたみかん畑なので、風の勢いは思つた程ではない。それでも雨の勢いは止まぬ。

下の「私の王子山」の丘の原には烈しく雨が降りしきつていく。杣道を急いで走り下る。父も後から道具を持っておりてく

る。

この時、私の頭に浮かぶのは学習した源実朝の前向き和歌『武夫の矢並繕るふ籠手の上に霞たばしる那須の篠原』

(金槐和歌集より)

であつた。この「王子山」には篠原と呼べる程の叢生はないのだが、篠を束ねて：時雨にすぶぬれになると、遥か私の家迄、駆けて帰らねばならぬので、この鎌倉幕府の將軍の心意気は妙に馴染んでしまつた。

かけ下る杣道は左側は断崖になつている事もあつて、一歩一歩ふみしめて石の階をおりねばならぬ。膝頭がカクン、カクンと反響し返す程の歩みを以てする、坂道であつて狭い。

因みに雨の降らない時の丘の原は、同じく源実朝の金槐和歌集にみえる次の和歌

『箱根路をわが越えてくれば

伊豆の海や 沖の小島に波の寄る見ゆ。』を、そぞろ偲びたくもなる眺望の良さがある。それ

にしても、後の歌の心境は、春から夏の由良の沖合を彷彿とさせる。

ともあれ、私の『王子山』は、堂の上の里山にみかん畑を持つ私にとつては、夏の激しい夕立に不意に逢い、秋のしとど降る時雨や霽に逃げまどう、駆け抜けねばならない踊場でもある。この踊場を通り抜けなければ私宅へ帰りつく訳には行かない。算を乱して、急ぎ通りすぎる通過場所が、童謡詩人 金子みすず氏では、もっと豊かで明るく、しなやかなイメージで受け入れられている。

(三)金子みすずの青海島の王子山

金子みすず氏の生いたちの中に、仙崎の町を青海島の王子山から見晴らす描写があつた。④『王子山から町見れば私は町が好きになる』と彼女はうたい、小山の中の石段を登ると、櫻の林でそれを抜けると頂上に出る。(全Ⅲ P.181)

目の前の瀬戸を越えると仙崎の町（現長門市）の全景が見えるようである。

③みすずの詩『干鯉のほひもここへは来ない。若い芽立ちの香がするばかり。（全三 P.181）』

童謡詩人金子みすずには『大漁』の有名な詩があるので、私はこの詩に、幼年時代に脇地区で地曳網引きに加わって、獲れた魚をバケツにもらって帰宅した体験を連想したり、彼女がうたう『銀の海』『日本海』。それにしても

われは海の子 白波の騒ぐ磯辺の 松原に云々

この心意気がうたわれなくなつて、砂浜に育つた自分のアイデンティティが寂しく感じられる。日本海の荒波を友として、昭和4年生まれはここ迄生きぬいて来たのに。今は何を誇りにしているのかな。と拍子抜けがするのは私だけだろうか。

(四) 若狭湾沖の観艦式

こんなこともあったのであ

る。昭和50年代だった。中曾根元総理が旗艦に坐乗しての、海上自衛隊の観艦式が、舞鶴市で行われた。この年の翌年が、オイル・ショックで国中が混乱したので覚えていたのだが、私が由良一二四九番地で、稲架に刈り取った稲束を父と兩人で掛けていると、湾口金ヶ崎を舳舻相衝んで、威風堂々と沖合へ進んで行く。湾口を出ると、孰れの艦も背景の朝来の半島の山影になじんで、灰色肉眼では可視できなくなる。博奕岬で陸地を離れると（由良より見て）、始めて前艦のともを追う後艦のへさきが続くのが判る。これだけ多くの艦が連なつて、由良の沖を航行するのは初めての眺めであつて、壮観であつた。正午を挟んで。

生まれて汐に湯あみして

波を子守の唄と聴き

千里寄せくる海の気を

吸いて童となりにけり

艦隊の航行が望見できる外浜は

由良や神崎や朝来の半島沿岸と、栗田や伊根や日置のあたりなど限られた荒浜でしかない。その意味でも、わが郷土は誇るに足るのであろう。

(五) せせらぎの魚（いしくろ）

私の王子山には、小流が山あいから流れ出して、この流れより上を『堂の上』とよんでいる。この小流に「はぜ」によく似た小さな川魚を見出したのは、もはや10年から昔に遡る。その当時私事で甚だ恐縮・失礼ながら、幼稚園へ入る前の孫に王子山のせせらぎにいた『いしくろ』一尾を見せてやりたいと念じ乍ら、偶々、飼犬の世話に追われて、孫の男児に対応できず、爾来、学童としても果たせず、14才を迎える中学生と成長を遂げた。

いしくろを、せせらぎで指摘して逢わせることはできなくなった。教えるには時に及ぶべしだ。

悔しいが、チャンスを逸して

しまった。願わくは清流の石の陰で、かの『いしくろ』は生きていてくれるであろうか。失敗をかみしめながら、ふりかえる、今まさに時の流れである。（平成19年4月19日記）

末尾ながら、使用させていた文献に感謝いたします。

(一) ①は 童謡詩人『金子みすずの生涯』矢崎節夫著 東京都JULA出版局

一九九五年九月十四日第七刷 全集のP.35より引用しました。

(二) ②も 同じ全集P.35より引用。

又、御教示いただきましたことを感謝いたします。

(三) 三つ葉つつじについては 由良幼稚園の能勢町子先生より。

(四) 実朝の和歌二首は宮津図書館の職員の方より。

御手洗ピジョンを読む

山口 幸一

草深い田舎の余命幾何もない老人が、今をときめく経団連会長御手洗富士夫氏に反論しようというのだから身の程しらずもいとこ、さしずめごまめの歯ぎしりというところだろう。

私自身若干の自嘲も交えて此の一文を書いた。

経済白書によると〇三年東証一部上場企業の経常利益は七二%、大手製造業に限れば一〇五%、増加となっている。まさに大田経済財政大臣がいとも軽やかに宣言した景気のいざなぎ超えであろう。しかし売上高を見るとわずかに一・二%の増でしかない。何故わずか一%台の伸びで七〇倍もの利益が得られるのか。

其の一方で、昨年末発表された経済開発協力機構の調査報告

書によると、日本の労働者の貧困率は、アメリカに次ぐ世界第二位の高さに位置する。

労働者の健康と生命を守る規制を、改革の名の下に次々と撤廃し、労働者を無視し、企業の利益のみを追求して居ればこうなる。

トヨタが考案した「看板方式」つまり必要な時にだけ必要な部品を用意させて在庫経費を圧縮する。モノだけではない、これを人間にも適用する。

「固定といわれる人件費を流動費に切り換える」これが至上命令だと大手メーカーの人事担当部長は言ったという。

まるで労働者はモノなみである。斯くして雇用の劣化は急速にすすみ、基本的人権の侵害とまで囁かれる様になった。

企業は正規雇用を非正規雇用

に切り換え、労働条件を切り下げ、労働者をモノの様に扱い、異を唱えれば容赦なく問答無用とばかり斬りすててゆく、働く自由の縮小は人権の自由の縮小に他ならない。働くという事は個人や家族の生計をたてるためだけのものではない。働く事によつて人は他者と交わり、社会に参加する、だから働く事は悦びであり、誇りでもある。其の悦びの中から自己を律するモラルが生まれ、責任意識が育まれてゆく、現在日本の社会から責任意識がうすれてゆくのは斯様な労働形態が深くかかわっているのではないか、貧困の無権利状態の中で、時間を切り売りしている非正規労働者達にモラルや高い責任意識など育まれる筈がない。

全雇用に占める非正規雇用の占める割合は労働経済白書によれば三三・八%に増大している。このすさまじい雇用の変化が社

会の悪化を招かない筈はない。

斯うした労働人権の破壊を、多様な働き方、雇用の流動性、再チャレンジなどと銘打って正当化し、旗をふっているのが、経済界であり、政界ではないのか。

かつて此の国の経済界は不況がつづけば国内市場を恢復しようとして努力した。労働者の賃上げにも前向きに取り組んだ。家計を豊かにし、個人消費市場の回復に努力した。社会を豊かにする事は、我が社を豊かにする事であった。だが現在は違う。古典的な景気循環論そのままに、まず大企業がよくなって、それが中小企業に及び、賃金が上昇し個人所得が拡大し、景気は上昇するという。だが度重なる政府の上昇宣言にもかかわらずわれわれの実態は深刻さを増すばかりである。

御手洗氏は言う。行き過ぎた労働規制は経済を萎縮させると、ならばきくが一体どこに行き過ぎた規制があったのか、更

に格差社会、少子化問題にも言及してみせる。だがそれを招来しているのが自分達のすすめて来た労働破壊である事に気付いて居ない。仕事があったり、なかったり、働けど働けど生活出来ない不安定な労働環境に置かれていた若者達がどうして家庭をもったり、子供を産み育ててゆく事が出来るのか、頻々と報道される暴力や虐待のかけに貧困の問題が指摘されている。現在先進国に於いては、雇用の機会均等、労働環境の整備充実、若者の自立の可能性と言った指標が次々と改善されていると言う。其の多くが労働に係るものである限り、経済界はその担う社会的責任において、なさねばならぬ事は多い筈だ。

それなのに現状を見るがい、談合、粉飾、偽装、脱税、およそ人間の考え得る悪の数々、発覚すれば深々と頭を下げてみせる企業的首脳達、これがいまの経済界のすがた。

日の丸、君が代を強調し、愛国心を強調し、果ては改憲の提起などで結んでいる。噴飯ものとしか思えない。

訂正とお詫び

「公民館だより」No.129

◎蜂子皇子 山下憲弥氏のP.15

関係系文中、崇峻天皇

(母は皇女) となつていますが

(母は蘇我小姉君) が正しい。

◎崇峻天皇暗殺余話 三森明氏

文中三段目後から8行目

学窓旻師は学僧旻師が正しく、

同じく後から3行目、落し目の

王子は落日の王子が正しい。

◎五十年目の真実 平間武氏

文中、修(しゅう)さんは、

昭和十七年に卒業後国鉄に奉職

は、読者から指摘があり問い合わせた結果、昭和十九年が正しい。

以上訂正してお詫びいたします。

す。

編集後記

由良岳も新緑に包まれ朝日に映えています。

先の登山には多くの参加者があり主催者として事故もなく終了できて喜んでいきます。

地区内の各団体とも新しい役員が選出されて活発に活動がスタートしてありますが「公民館だより」にも多忙な日々のなか、原稿を無理にお願いしました。

「公民館だより」がお手元に届く頃は地域最大のイベント、「由良川てんころレース」が無事終了しているでしょう。

地域が一体となって盛りあげた行事です。これから益々盛会となり地域の活性化に繋がることを期待しています。

公民館も新メンバーでスタートしました。秋には地区運動会を予定しています。老若男女一堂に会し楽しめる運動会にしたいと考えています。

(飯澤)